

人形劇指導における課題に関する一考察

糸 井 嘉
(大学院発達教育学研究科児童学専攻)

中 村 綾
(大学院発達教育学研究科児童学専攻)

呂 程
(大学院発達教育学研究科児童学専攻)

矢 野 真
(児童学科准教授)

棚 橋 美 代 子
(児童学科教授)

はじめに

本研究は、保育者養成の学生が人形劇を習得する際の、技術面での現状および問題点を明らかにし、指導の課題について検討することを目的とする。

人形劇に関する研究は発展途上にあり、科学的検証がなされたものは少ない。その理由を向平らは「絵本や紙芝居等と異なり、『劇』そのものが児童文化財であるため1回1回の人形劇を形として現存しておくことが不可能であるからだと推測」¹⁾している。保育者養成と人形劇の関係については、米谷らが「丹下進の人形劇に学ぶ」²⁾の中で、学生が人形劇を通して様々な経験を持ち得ることを挙げ、その意義について述べている。また、向平らは学生が演じる「なかよし」とプロの人形劇人が演じる「なかよし」の、脚本およびそれぞれの演技に対する子どもたちの反応を比較し、保育学生に対する人形劇の実習指導の有効性について論じている³⁾。作品分析としては、演劇の3要素、俳優（人形劇では演者）、脚本、観客のうち、観客に着目した研究がある。向平らは、丹下進と濁見英明、両氏の演技に対する観客の反応をビデオで撮影、比較し、観客の行動観察による作品論の可能性を示唆している⁴⁾。

以上のように、保育者養成の中での人形劇指導の意義が論じられると共に、人形劇研究の科学的検証が試みられている。しかし、指導に関する技術的な視点での研究はなされていない。人形劇が「現存しておくことが不可能」な「劇」である以上、演者の質が常に作品に影響する。保育者養成の学生が人形劇を学ぶ際にも、基本

的な技術を身につける必要があると考え、現状を明らかにしたうえで、指導上の課題について検討したい。

方 法

人形劇の演者の身体の動かし方を習熟度別で比較する。

人形劇「なかよし」を演じる学生の様子を正面からビデオで撮影する。映像をシリコンコーチ（画像解析ソフトウェア）に取り込み、演技中の演者自身の移動距離、腕の傾き、身体の傾きについて画像解析を行い、客観的データを得る。

なお、撮影は京都女子大学児童学科の保育者養成課程で4回生の必修科目である「保育技能実習」（2011年度）にて行った。

仮 説

片手遣い人形の人形劇における演技は、演者の習熟度が低いほど手先だけの演技になり、下半身が動かないため、安定した人形操作ができないのではないかと考える。

対象者

4つの群がある。まず、「保育技能実習」のみを受講する4回生で、人形劇経験は「なかよし」に関連する授業6回の期間（人形制作から撮影を行った試験の日までを含む約1カ月半）の2群各9名である。つぎに、同じく保育者養成課程において、「保育技能実習」および「児童学演習（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）」で人形劇活動に関わり、約1年の経験がある5名の群である。最後

に、「保育技能実習」および「児童学演習（Ⅰ、Ⅱ）」を受講し保育者養成課程を修了後、今回の保育技能実習にティーチングアシスタントとして関わった、人形劇経験約1年半の1名の群である。

経験年数約1年半の1名をA群、経験年数約1年の5名をB群、経験が授業のみの各9名をそれぞれC群（挨拶の場面）、D群（相撲の場面）とした。

対象作品および対象場面

丹下進脚本の「なかよし」は、一人二役で演じる片手遣い人形の人形劇である。片手遣い人形による基本的な動作の組み合わせで構成されている作品であることから、本研究の対象作品とした。

「なかよし」は2人の子どもが遊ぶ5つの場面（挨拶、かくれんぼ、相撲、綱引き、汽車）から成り立つ作品である。今回は特に次の場面を取り上げた。

- ・挨拶の場面…片手遣い人形の基本的な動作（歩く・走る・這う・伏せるなど）の単純な組み合わせで構成されたシーン。
- ・相撲の場面…手先の複雑な動きと、舞台上手・下手への移動が多く含まれるシーン。

実験結果および分析

「なかよし」の登場人物は2人の子どもであるが、今回対象となる演者は全員、右手をミーちゃん、左手をタマちゃんとしている。以後、「右手」を「ミーちゃんを演じている方の手」という意味で表記する。左手についても同様である。

《挨拶の場面》

挨拶は「なかよし」の最初の場面で、2人の子ども（ミーちゃん、タマちゃん）が登場し、観客に向かって挨拶をするというシーンである。ここでは演者自身の総移動距離と、舞台上手で右手の人形を操作する場合の腕の傾きを見る。

総移動距離については、測定ツール「連続距離」の機能を使用し、演者が演技中にどれだけの距離を移動しているかを求めた。右足くるぶ

し内側の一点を基準として測定した。（図1）

場面の範囲は、ミーちゃんが歌いながら登場するところ^{注1(1)}から、挨拶を終えてミーちゃんがタマちゃんを遊びに誘う直前^{注1(4)}までとした。

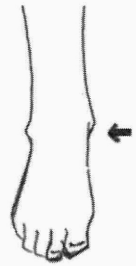


図1

腕の傾きについては、測定ツール「垂直角」の機能を使用し、蹴込みに対し垂直な線から腕がどの程度傾いているかを求めた。肘と手首の外側の一点を基準とした。測定した場面は、下手にいるミーちゃんが上手に移動して下を向く動作をする2ヶ所である。1つは、舞台下に恥ずかしがって隠れたタマちゃんに対し、ミーちゃんが声をかける場面（第一場面とする）^{注1(2)}で、ミーちゃんが最初に舞台下を覗き込む瞬間の右手の腕の傾きを見た。2つめは、お辞儀をしたまま起き上がらないタマちゃんに対して、ミーちゃんが声をかける場面（第二場面とする）^{注1(3)}で、ミーちゃんがタマちゃんの肩にタッチした瞬間の右腕の傾きを見た。

測定結果を表1のようにまとめた。

表1 挨拶の場面の測定結果

	第一場面 (度)	第二場面 (度)	演者の 総移動距離 (m)	
a-1	15.7	27.9	1.72	A群
b-1	35.9	40.7	2.25	B群
b-2	26.7	45.8	1.39	
b-3	27.5	39.8	1.23	
b-4	28.5	24.1	0.72	
b-5	26.1	39.2	0.77	
c-1	42.2	50.9	0.25	C群
c-2	31.4	47.3	0.13	
c-3	38.3	49.1	0.41	
c-4	34.3	43.6	0.25	
c-5	41.6	44.7	0.06	
c-6	9.3	46.7	0.95	
c-7	42.4	52.3	0.03	
c-8	46.8	59.5	0.11	
c-9	44.4	68.6	0.07	

この結果をもとに、B群、C群についてはそれぞれ平均値を求めた。

・挨拶—演者の総移動距離

A群の1名は約1.72m、B群5名の平均値は約1.27m、C群9名の平均値は約0.25mとなった。

・挨拶—第一場面・腕の傾き

A群の1名は約15.7度（写真1）、B群5名の平均値は約28.9度、C群9名の平均値は約36.7度となった。

・挨拶—第二場面・腕の傾き

A群の1名は約27.9度、B群5名の平均値は約37.9度、C群9名の平均値は約51.4度となった。

総移動距離の数値から、習熟度が低いC群では演者は演技中に足が動いておらず、舞台中央あたりで立ったまま演じていることが明らかである。演者が舞台中央に立ち右手の人形を上手に出して演じようとする、斜めに腕を伸ばさなければならず、それが腕の傾きとして現れていることがわかる（写真2）。

《相撲の場面》

相撲は2つめの遊びの場面である。「弱虫」と言われたタマちゃんが、「そんなこと言うならお相撲で来い」と次の遊びを提案するところから始まる^{注2(1)}。ここでは演者自身の総移動距離と、上手・下手への人形の移動距離および人形を操作する際の身体の傾きを見る。

総移動距離については、挨拶の場面同様、「連続距離」ツールを使用し、右足くるぶし内側の一点を基準に測定した（図1）。場面の範囲は、タマちゃんの「僕、弱虫なんかじゃありませんよ」というセリフ^{注2(1)}から、ミーちゃんが次の遊びを提案する直前まで^{注2(5)}とした。

体の傾きについては、両足間の中心点を重心とし、その点と人形同士の中心点をつないだ線が、蹴込みに対し垂直な線からどの程度傾いているかを求めた（図2）。測定した箇所は、相撲の取り組みを始めたミーちゃんとタマちゃんが最初に上手に行き切った瞬間^{注2(3)}と、そこから下手に行き切った瞬間^{注2(4)}の2ヶ所である。

なお、参考として、取り組みを始めた蹴込み

中央^{注2(2)}から上手までの人形の移動距離と、上手から下手までの人形の移動距離を求めた。測定にはツール「2点間距離」を使用し、左手手首の外側の一点（人形の背中中央部分）を基準とした。

測定結果を表2のようにまとめた。

表2 相撲の場面の測定結果

	上手移動：体の傾き（度）	人形の移動距離（m）	下手移動：体の傾き（度）	上手から下手への移動距離（m）	演者の総移動距離（m）	
a-1	2.8	0.22	1.8	0.44	2.85	A群
b-1	4.3	0.23	8.9	0.42	1.08	B群
b-2	1.2	0.23	6.2	0.40	1.16	
b-3	3.6	0.25	9.9	0.39	0.32	
b-4	0.4	0.25	10.1	0.49	0.40	
b-5	7.5	0.22	5.1	0.36	0.51	
d-1	11.9	0.20	12.6	0.52	0.35	D群
d-2	8.7	0.24	9.6	0.52	0.71	
d-3	9.7	0.24	10.4	0.48	0.11	
d-4	9.5	0.26	14.2	0.60	0.14	
d-5	12.3	0.23	10.7	0.50	0.20	
d-6	13.7	0.22	6.0	0.44	0.17	
d-7	11.3	0.18	5.6	0.37	0.15	
d-8	8.7	0.13	7.2	0.33	0.83	
d-9	11.2	0.26	4.7	0.29	0.28	

この結果をもとに、B群、D群については、演者の総移動距離と上手・下手での身体の傾きのそれぞれの平均値を求めた。

・相撲の場面—演者の総移動距離

A群の1名は、約2.85m、B群5名の平均値は約0.69m、D群9名の平均値は約0.33mとなった。

・相撲の場面—上手移動の際の身体の傾き

A群の1名は約2.8度（写真3）、B群5名の平均値は約3.4度、D群9名の平均値は約10.8度となった（図2）。

・相撲の場面—下手移動の際の身体の傾き

A群の1名は約1.8度、B群5名の平均値は

約8.1度、D群9名の平均値は約9.0度となった。

総移動距離については、習熟度が低いD群においては、0.69m移動した1名を除くと総移動距離0.30m未満であり、挨拶の場面同様ほとんど舞台中央から動いていないことが明らかである。

演者が舞台中央から動かないということは、人形が相撲の取り組みをしている状態で、上手移動の時に右手を、下手移動の時に左手を無理に伸ばすこととなり、これが全身の傾きの原因となっている（写真4）。

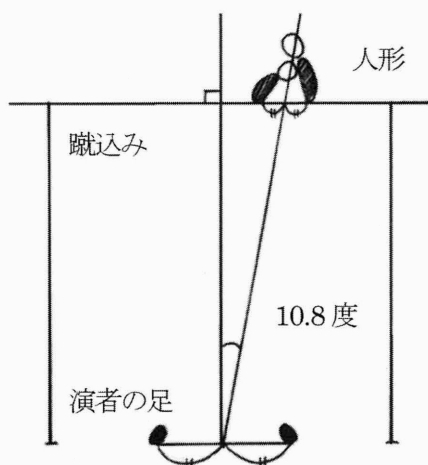


図2

下手移動後の身体の傾きの平均値は、B群とD群であり差がみられない。

まずB群は、D群より足が動くものの、きちんと上手・下手まで行き切ることができていない。中央から上手という舞台半分の距離では問題ないが、上手から下手という舞台全体での移動は不十分であり、その点が総移動距離や下手での身体の傾きの数値に表れている。

つぎにD群は、表2によると下手での身体の傾きに大きな差がある。傾きが小さいd-6～d-9は、上手から下手への人形の移動距離も短い。演者自身が移動せず、また腕を伸ばさない（身体が傾かない）状態では、人形の移動範囲が短くなり、蹴込み全体を活かした演技ができていないといえる。

考 察

分析の結果、いずれの場面においても、習熟度が高い者の方が習熟度の低い者より演技中の演者の総移動距離が長いということが明らかとなった。習熟度が高い者は人形の動きに合わせて下半身を動かすことができおり、上手や下手での演技にも無理な姿勢がみられない。習熟度が低い者は演技中に足が動かず、上手・下手での人形操作において、腕が倒れる（挨拶の場面）、身体が傾く（相撲の場面）などの無理な姿勢が見られた。つまり、安定した人形操作ができていないと言える。

指導の課題

考察により、「保育技能実習」における「なかよし」習得にあたっては、セリフや全体の流れがある程度身につけてからでなければ、下半身の動きにまで意識が向かないという現状が明らかとなった。今後の指導上の課題として、以下の3点を考えることができる。

1つめに、舞台上での移動の基本動作の練習を充実させることである。学生は「なかよし」を演じるまでに、片手遣い人形での「歩く」「走る」「這う」などの移動の基本動作について学ぶ。この舞台の上手から下手までを広く使った移動の基本練習を丁寧に行うことにより、人形だけでなく演者自身が上手・下手へ移動することに早く慣れることができると考える。

2つめに、立ち練習の際、一人で舞台全体を使用することである。現在の「保育技能実習」の全体練習では、ひとつの舞台に2～3人が並んで練習しているため、その場で立ったまま演じる形となり、上手、下手への移動の感覚や距離感が掴みにくいのだろうと考える。

3つめに、ビデオやモデルの演技を見て、下半身の動きに着目させることである。演者としての自分の姿を客観化することで、人形の動きだけでなく全身（特に下半身）への意識を高めることができると考える。

まとめ

向平らは丹下進の人形劇について、「脚本や演出において、より現実に近いかたちで描写している。そのうえで、人形であるからこそ可能な人形劇独自の演出方法を行っており、子どもたちは虚構の世界を楽しむことができる」⁵⁾と述べている。人形劇の動きの特徴として、①現実の人間の姿を反映した動き、②人形ならではの動き、の2つを挙げることができる。この矛盾する2つの特徴によって、「生きているように見える」人形が、「人間にはできない動きをする」から面白い、という、人形劇の本質が成り立っている。この矛盾をひとつの作品世界の中で成立させるためには、安定した人形操作が不可欠である。

本稿により、習熟度が低い者が安定した人形操作ができないことの一因として、下半身の動きが関係していることが明らかとなった。「保育技能実習」における指導の課題としては、特に下半身の動きに着目し、①移動の基本動作の練習、②舞台全体を使った練習、③演者の姿の客観化、の3点を挙げた。演者が下半身の動きを意識することで、より安定した人形操作を身につけることができると考える。

今回の実験では被験者数が少なく、また比較した群の人数にばらつきがあった。多人数のデータから検証することが今後の課題である。また本稿では触れなかったが、高身長の方は高さ155センチの舞台では演じるのに適した安定した姿勢を取りづらく、その点が移動距離や腕の傾きに影響している可能性があり、今後詳細な検証が必要である。

注1 挨拶の場面の脚本

ミー：らんらんらんらん…（歌いながら登場）⁽¹⁾
 タマ：（顔を出してすぐに隠れる）
 ミー：あ、タマちゃんだな。おい、タマちゃん出ておいでよ。⁽²⁾
 タマ：そんなこと言ったって…わ！（出てくるがすぐ隠れる）
 ミー：恥ずかしくなんかないから出ておいでよ。
 タマ：そんなこと言ったって…わ！（出てくる

がすぐ隠れる）

ミー：しょうがないな。じゃあわたしが出してあげる。タマちゃん出ておいで。（タマちゃんを抱えて出てくる）よいしょ、よいしょ、よいしょ。タマちゃん前向いて。（タマちゃんを前に向かせる）
 タマ：わ！（後ろを向く）
 ミー：ダメ、前向いて。（タマちゃんを前に向かせる）
 タマ：（その場で倒れる）
 ミー：タマちゃん、じっとして。（タマちゃんを起こす）
 タマ：（逆方向に倒れる）
 ミー：動いちゃだめ。（タマちゃんを起こし、動かないことを確認して、客席を向く）あ、皆さんこんにちは。わたし、ミーちゃんって言います。どうぞよろしく。
 タマ：あのね、ぼくはね、タマちゃんって言います。どうぞよろしく。（2人とも頭を下げる）
 （ミーちゃんが起き上がり、まだ下を向いているタマちゃんを見て慌てて頭を下げる。タマちゃんも同じことをする。これを何度か繰り返す。ミーちゃん、起き上がってタマちゃんのところに行く）
 ミー：タマちゃん、タマちゃん、もう良いんだってば。（タマちゃんの肩をたたく）⁽³⁾
 タマ：え、え、あ、そっか。
 ——この後、ミーちゃんが「何か面白いことして遊ばない？」と遊びに誘う。⁽⁴⁾

注2 相撲の場面の脚本

——かくれんぼで嘘泣きをしたタマちゃんに対し、ミーちゃんが「弱虫」と言う。
 タマ：ぼく、弱虫なんかじゃありませんよ。⁽¹⁾
 そんなこと言うならね、お相撲で来い、お相撲で。
 ミー：え、お相撲？ よーし、負けないぞ。見合って見合って。（上手を向いて屈む）
 タマ：（ミーちゃんの姿勢を見て）見合って見合って。（上手を向いて屈む）
 ミー：どっち向いてんの。（タマちゃんを下手

に向ける) 見合って見合って。

タマ: 見合って見合って。はっけよい,

ミー: のこった。(タマちゃんの腹に頭をつける)⁽²⁾

のこった, のこった, のこった。(ミーちゃんを押して2人は上手に移動する)⁽³⁾

タマ: のこった, のこった。(タマちゃんが押し返して2人は下手に移動する)⁽⁴⁾

ミー: のこった, のこった…

タマ: のこった, のこったー, あらほい。(四つに組む)。へっへー, 上手いこと四つに組んだぞ。

ミー: うーん, 負けないぞ。のこった, のこった。

タマ: のこった, のこった。(繰り返す)

ミー: あっ。(倒される) あーあ, 負けちゃった。

タマ: あーら, 勝っちゃった。

ミー: やっぱりタマちゃんは強いな。

タマ: ミーちゃんだって強いよ。

ミー: タマちゃん強い。

タマ: ミーちゃんだって強い。

——この後ミーちゃんが綱引きを提案する。⁽⁵⁾

参考・引用文献

- 1) 「保育学生に対する人形劇の実習指導に関する一考察」向平知絵, 棚橋美代子, 米谷淳 (神戸大学大学教育推進機構大学教育研究 2007) pp. 34
- 2) 「丹下進の人形劇に学ぶ」米谷淳, 棚橋美代子 (神戸大学大学教育推進機構大学教育研究 2006)
- 3) 1) 同著
- 4) 「人形劇『なかよし』の作品分析」向平知絵, 棚橋美代子, 米谷淳 (京都女子大学発達教育学部紀要 2009)
- 5) 1) 同著 pp. 37

写真1
《挨拶》
第一場面
A群の例

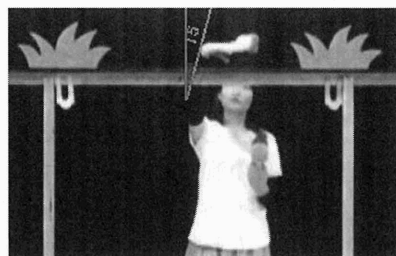


写真2
《挨拶》
第一場面
C群の例



写真3
《相撲》
A群の例

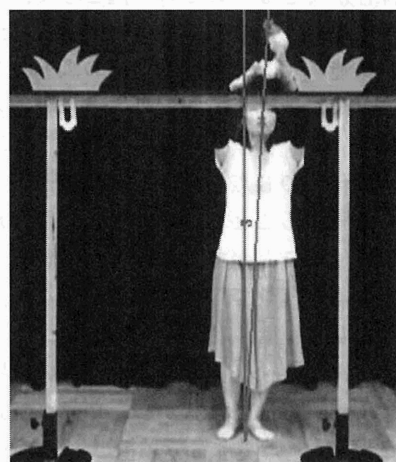


写真4
《相撲》
D群の例

